

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —梶谷信之—

梶 谷 信 之

【経歴】

- 1974年3月 大阪府 私立清風高等学校卒業
- 1974年4月 日本体育大学体育学部体育学科入学
- 1978年3月 日本体育大学体育学部体育学科卒業
- 1978年4月 (株)紀陽銀行入社
- 1983年3月 (株)紀陽銀行退社
- 1983年4月 奈良教育委員会嘱託職員(1984年4月迄)
- 1984年5月 奈良県立医科大学助手(1988年3月迄)
- 1988年4月 岡山大学教養部講師
- 1991年4月 岡山大学教養部助教授
- 1994年4月 岡山大学教育学部助教授
- 2007年4月 岡山大学教育学部准教授
- 2008年4月 岡山大学大学院教育学研究科教授(現在に至る)
- 2014年4月 岡山大学教育学部附属幼稚園長兼務(2017年3月迄)

【競技歴】

- 1979年 フォートワース世界選手権大会(アメリカ) 団体2位
- 1980年 モスクワ・オリンピック大会(旧ソ連) 代表:日本はボイコットのため欠場
- 1981年 モスクワ世界選手権大会(旧ソ連) 団体2位, 個人8位, 平行棒3位
- 1982年 ニューデリー・アジア大会(インド) 団体2位
- 1983年 ブダペスト・世界選手権大会(ハンガリー) 団体3位
- 1984年 ロサンゼルス・オリンピック大会(アメリカ) 団体3位, 個人8位, 平行棒2位

1. 競技との出会い

私は宮崎県で生まれ中学生までそこで過ごした。

体操は6人兄弟の長男である兄の影響で始めたが、次男・次女も中学校で体操をしていたため、小学生の時にはすでに体操始めており、3年生には倒立が出来ていたという記憶が残っている。小

学校・中学校での指導者は長男であり、中学校時代は厳しい練習の毎日であった。中学校の部活動練習が終わると兄が車で迎えに来て、兄の出身高校へ行って高校生と一緒に練習を行った。また、自宅においては、風呂上がりに柔軟・筋力トレーニング・倒立練習などを行うのが日課となっていた。

九州の田舎であったため、あまり情報は豊富で

はなかったが、長男がインターハイへ出場したことも有り（監物永三先生の1学年上）、全国のレベルは知っていたようである。

中学3年生の時の試合では県大会個人1位、九州大会個人2位の成績であった。その年に第1回の全国中学校体育大会が開催されたが、宮崎県からは推薦されず、県からは誰も出場しなかった。

高校進学のとおり進学について色々と検討したが、宮崎県内の高校では競技成績も伸びないと考え、高校は大阪の清風高校へ行くこととなった。大阪には親戚もあることから、兄が清風高校へ見学に行き清風の良さを感じて帰ってきたことも決め手となった。

清風での生活は寮が無かったため一人で下宿することとなったが、兄の厳しい指導を苦痛に思っていた私は、不安と言うよりは少し開放的な気分であった。下宿先では、岡山県出身の3年生の先輩も下宿されていたため、心強く生活できた。また、高校のOBの先輩の実家が牛乳屋さんであったので、1年生の時には早朝に牛乳配達のアパートをしてから学校へ行くという生活であった。

しかし体操の強豪校である清風高校の練習はやはり厳しいものであった。1年生の時には十数人いた同級生も3年生の時には3人となっていた。中学校の時には、床、跳馬、鉄棒の3種目しか練習していなかったため、あん馬、つり輪、平行棒は高校から練習することとなり、大変苦労した。私は高校2年生の国体で初めてレギュラーとなり、高校3年生では、インターハイ個人3位、国体個人2位の成績を取ることが出来た。私が高校3年生の時には、2年生に具志堅幸司さん、1年生には外村康二さん、平田倫敏（日大卒）さんがおり、4人共に1984年のロサンゼルス・オリンピック大会へ出場することになるとは、この時は想像もしていなかった。1学年下の具志堅さんとは先輩後輩であると共に、良きライバルとして高校生活を送った。彼の存在は私が実力を向上させるために大きな刺激となった。

私の体操人生の飛躍の大きな原因の一つとなっ

たのは、高校2年から3年の間の春休みに実施された、全国選抜の男子高校生5人による3週間のアメリカ遠征であった。3週間で9回に及ぶ試合と演技会というハードスケジュールであったが、現地の人々に熱烈な歓迎を受けた本当に素晴らしい海外遠征であった。選手たち5人全員が感激し、再びこのような遠征に参加出来ることを夢見て、その後の飛躍を誓い合った。その後の5人は、それぞれの場所で活躍をしていった。

高校卒業をひかえ大学進学のことを決める時期となった。オリンピックへ出場された清風の先輩である監物永三先生、岡村輝一先生、藤本俊先生の出身である日本体育大学はやはりあこがれであったため、そこに入学を決めた。

2. 日体大で思い出

日本体育大学体操競技部へ入ると人数の多いことに驚いた。1年生は学生寮で過ごし、2年生からは合宿所に入り2～4年生の選抜された48人が共に生活した。1年生では門限も有り、夜遅く迄練習が出来ないため朝練習にも通った。2年生では合宿所の生活が始まり、2年生の当番である朝・晩のご飯作りに四苦八苦し、2年生からレギュラーとなり、3年生ではインカレ個人3位となった。

4年生では部員約300人のキャプテンとなったが、その年のインカレで団体優勝できずくやしい思いで数ヶ月練習に励み、全日本選手権大会では団体優勝することが出来た。体育館にピットが出来たのもこの頃で、当時流行っていた鉄棒の離れ技など各種目の高難度技に挑戦することが可能となり、各選手の技能も飛躍的に進化していった。私も当時ソ連の選手が始めた鉄棒の離れ技であるトカチェフを練習し、試行錯誤しながら修得したことを記憶している。また、鉄棒の片手車輪などはピット無しでは修得出来ない技の一つで有り、最初は手が離れて飛んでいくことが当たり前前の練習が必要であったため、ピットの存在は非常に大

きいものであった。ピットの設置によって、大怪我の発生が非常に少なくなったと思われる。

大学ではそこそこの成績を上げたが、まだまだ当時の体操日本の代表になることは夢のまた夢であった。それどころか、ナショナル強化選手12名（全日本選手権大会で12位まで）にも届かない実力であった。とりあえず実力を上げることを目標として4年生では基本練習に集中した。

大学を卒業する時期になって就職先を考えなければならない重要な分岐点に立たされた。オリンピック大会を目指して紀陽銀行へ行くか、地元の宮崎国体のために宮崎へ帰るのかという大きな選択に迫られた。オリンピック大会は届かぬ夢のように思えたが、夢に向かって進むために思い切って紀陽銀行へ入ることにした。

紀陽銀行入行後、大学4年生で毎日努力した基本練習の甲斐があって、大学卒業後1年目の時に行われたストラスブル世界選手権大会二次予選会の規定演技で個人2位となった、いや、なってしまったというべきだろう。この成績にナショナル選手にもなっていない自分自身が大変驚いてしまい、次の日の自由演技では失敗の連続で2位から12位へ陥落してしまった。しかしこの成績により自信を持った私は、その後の1年間の必死な練習により次年度にはフォートワース世界選手権大会の代表に選出された。初めての世界選手権大会ではノーミスで試合を終えたが、団体2位という成績に、帰国後お叱りを受けた。（前年のストラスブル世界選手権大会までの20年間、日本は世界の王座に君臨していたからである）

好調のまま迎えた社会人3年目のモスクワ・オリンピック大会の予選では、予定通り選手に選出されオリンピック大会ですばらしい成績を上げることを夢に見て練習していた。その矢先、オリンピック大会のボイコットが決定し奈落の底へ落とされてしまった。当時25歳という心身共に絶好調の時期であっただけに、オリンピック大会不参加は到底受け入れられない現実であった。1ヶ月くらいは練習に実が入らない状態が続いたが、そ

れでも前に進まなければならない現実を踏まえ、次の大会へと心を入れ替えていった。しかし、次のオリンピック大会を目指すには4年間が非常に遠く感じた。

その年に、オリンピック大会をボイコットした国々が中心となって、モスクワ・オリンピック大会代替試合がアメリカで行われた。団体は中国に負けて2位だったが、個人総合は私が優勝した。優勝の喜びとモスクワ・オリンピック大会ボイコットの無念が入り交じった思いであった。

その後、1981年の世界選手権大会、1982年のアジア大会と一步一步進んでいったが、1983年に一時バーンアウト状態となり約1ヶ月間は極度の放心状態となった。体育館へ行って何とか練習したいと思っても、意欲が沸かず座って見ただけで練習出来ないという葛藤の時間が過ぎていった。もう来年にはオリンピック大会が迫っており、絶対練習しなければならないという思いを強く持ち続けて、もがきもがいて何とか精神状態を持ち直していった。

そんなロサンゼルス・オリンピック大会を2年後に控えた頃、大学のコーチである阿部和雄先生から転職のお誘いがあった。選手生活も終盤にさしかかった年齢であったこともあり、紀陽銀行からどこかの大学へ行くことが良いのではないかとということで、奈良県へと転職することとなった。

3. オリンピック大会でのメダル獲得

奈良県へ転職した後、やっとの思いでロサンゼルス・オリンピック大会の代表へとたどり着いた。長い道のりであったが、ようやくたどり着いた思いであった。29歳という選手生活としては終盤にさしかかっていたけれど、4年前の無念をはらすために奮起した。しかし、それまでの約2年間は故障との闘いであった。

阿部和雄先生が監督、監物永三先生がコーチでロサンゼルス・オリンピック大会へ臨んだ。メダル獲得作戦を立て、合宿練習を行った。各選手に

メダルを狙える技の開発が指示され、私は平行棒をその目標において練習を行った。

オリンピック大会における平行棒の種目別決勝の演技では、着地技における2秒足らずの時間に色々なことが頭の中をめぐった。後から考えると、そんな短時間で色々なことを考えられたのかと不思議な気がした。決勝では完璧な演技を実施し、メダルを獲得することができた。小学校から体操を始めて約20年、ついに夢を実現出来た喜びで感無量となった。自分自身はもちろんのこと、当然家族も喜んだが、特に長男は自分のことのように喜んでくれたことと思う。長男は、実家が八百屋をしているということで、大学へは行かせてもらえず体操を断念した。その悔しい思いを私への指導にぶつけていたのだと思う。そのことを考えたとき、私もその思いに報いることが出来たことに対して、大きな喜びを感じた。

4. その後の人生

奈良県立医科大学でオリンピック大会に出場し、その年の10月には奈良国体が開催された。29歳という年齢まで無理矢理頑張ってきたことも有り、その年に体調を崩してしまった。奈良県では国体後に橿原市でジュニア体操教室を立ち上げ、私もジュニアの指導に当たった。

しかし、4年後の1988年には岡山大学へ転勤することとなった。岡山大学では当初は教養部という所へ所属し体育実技や講義を担当した。当時の岡山大学には教養部と教育学部にそれぞれ保健体育講座があり、教養部の方に日本体育大学卒業の先生方が多く在籍されていた。転勤の数年後に教養部が廃止となり、体育の先生方は教育学部保健体育講座へと配置換えになった。

岡山大学へ転勤してすぐに体操部の顧問を引き継いだ。岡山大学体操部は昭和24年創設の伝統ある体操部であり、OB会と協力しながら約30年間その伝統を何とか守ってきているところである。

教育学部においては、くしくも藤本俊先生と同様に岡山大学教育学部附属幼稚園長として3年間を過ごし、園児と共に楽しい日々を過ごしたことは一生の良い思い出となった。

5. 後輩に一言

私は大学時代まではオリンピック大会へ出場出来るような特別に強い選手という存在ではなかった。しかし自分が歩んだそれぞれの世代においてトップを目指し、常に基礎をしっかり練習して、コツコツやってきたと考えている。大学4年生で再度基礎の大切さを感じ、そのことを真剣に取り組んだことが、その後のオリンピック大会銀メダルへつながったと信じている。後輩の皆さんも、地味な基礎練習を再度見つめ直して飛躍へとつなげていてもらいたい。基礎練習が自分を飛躍させると信じて！



